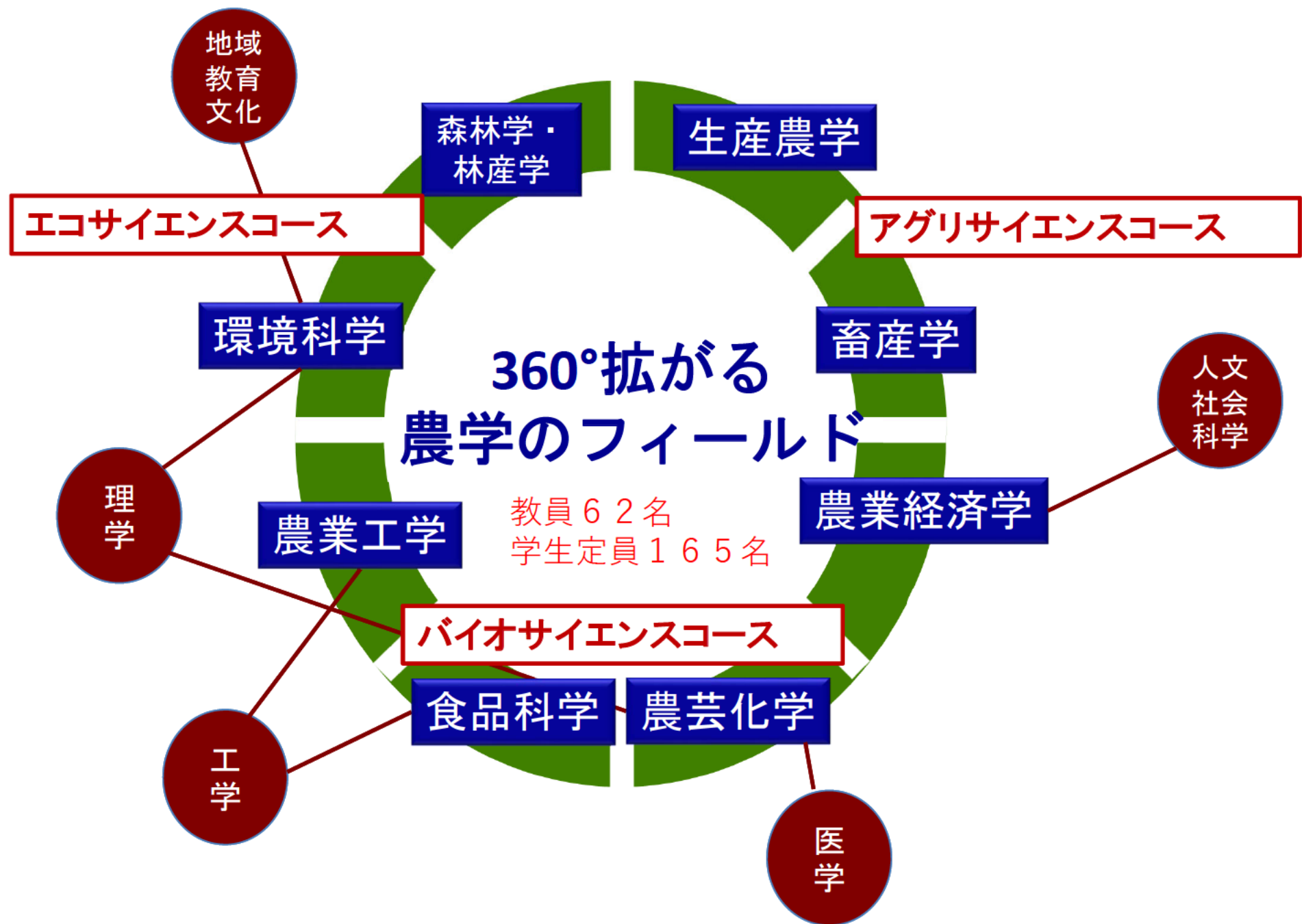




令和元年度の実績に係る キャンパス経営力評価ヒアリング

鶴岡キャンパス

鶴岡キャンパス長 村山 秀樹



教育環境

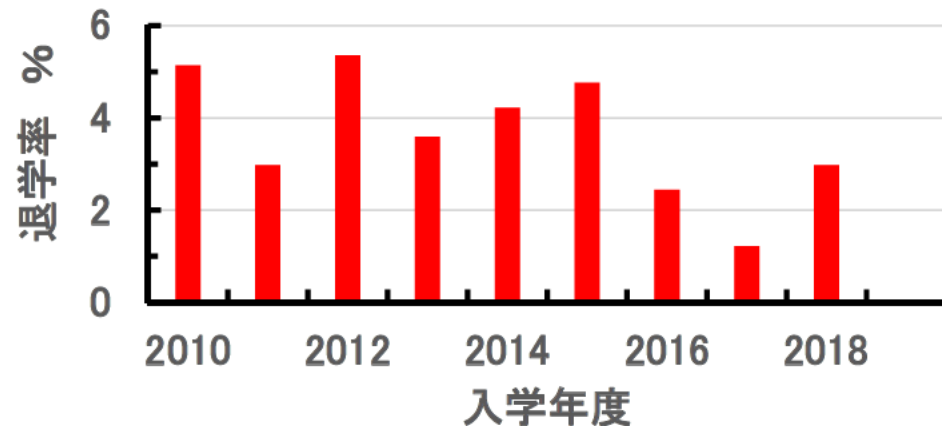
年度目標① これまで以上にキャンパスおよび学部運営に学生の声が届きやすくするため、学生交流の場としての学習および交流スペースを30%増やすとともに、学生参加の運営協議会やFD委員会等の仕組みを見直す。

達成状況①

- ・ 学生が自由に利用できる交流スペースとして、旧学務担当事務室を多目的ホールとして整備した（97m²）（26.2%増）。
- ・ スペースの有効活用を図るため、教員スペースの現状調査、分析を行い教員スペースの見直しを行い、順次移動や整備を実施した。
- ・ 学生参加の運営協議会やFD委員会（それぞれ年2回開催）に、学生が参加しやすい仕組みをつくるために、会議の日を学友会総会の日を設定すること、携帯アプリを使うことなどについて検討した。



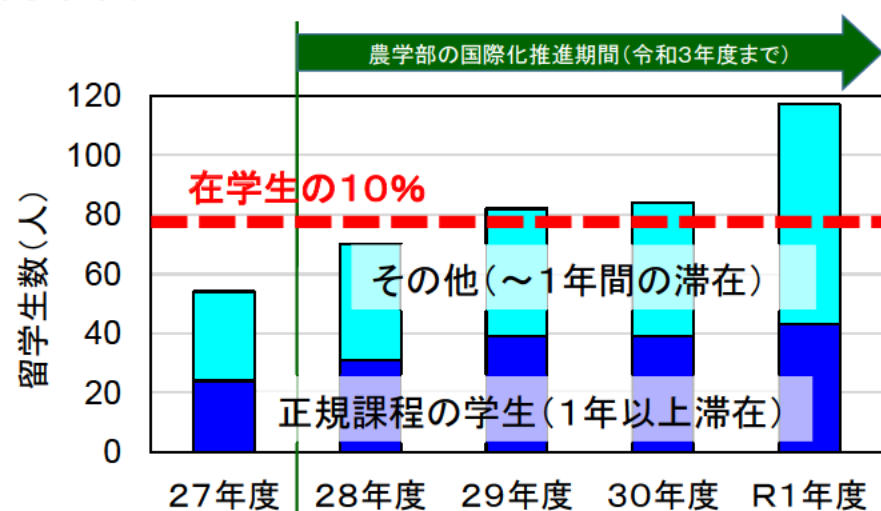
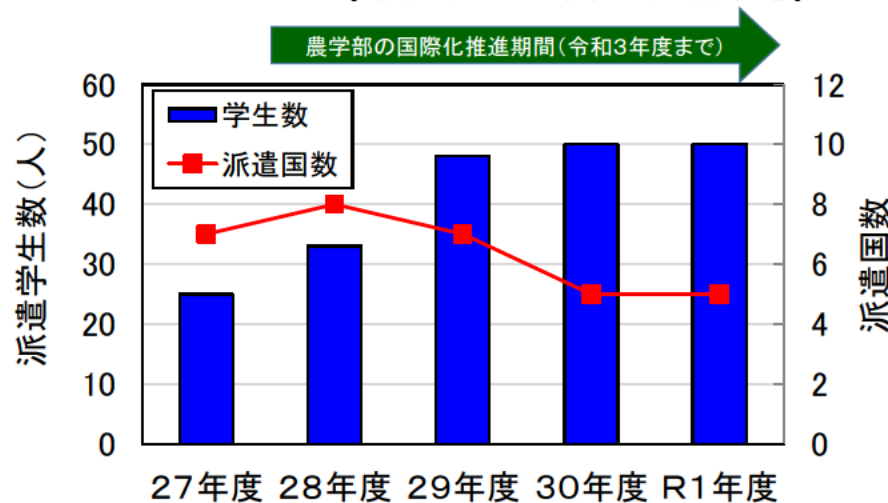
本学部学生の退学率の推移(2010年度入学以降)



国際交流

年度目標② 留学生向けにシラバスや各種申請書等の50%の英語化を進めるとともに、留学生の居住環境の整備計画を進め、短期留学生を含めて留学生の受入数を学生総数の12%を目指す。

達成状況② 大学院のシラバスの英語版を完成させるとともに、使用頻度の高い各種申請書や様式14件すべてについて英語化を完了した。留学生の受け入れ数は、短期留学生を含めて118名（学生総数の16%）に達し、当初の目標を上回った。また、留学生向けに、鶴岡市の市営住宅4戸（最大12名が入居可）を借り受けた。



新カリキュラム(国際展開プログラムを含む)も始まり、卒業生を地域で生かす工夫を。

ダブル・ディグリー制度と連動して大学院留学生増へつなげる

国際交流実績例

- ①国際協力機構（JICA）地域別研修
「アフリカ地域稲作収穫後処理コース」
8月19日～9月27日 17名



- ③ショートステイプログラム 2019
in タイ・チェンマイ大学
9月21日～28日 学生8名



- ②公益財団法人住友電工グループ社会貢献基金
寄附講座アジアの水・食・健康リスク講座
（第3回海外セミナー in カンボジア大学）
9月20日～28日 学生13名



- ④サマースクール in ドイツ・イタリア
9月8日～25日 学生10名



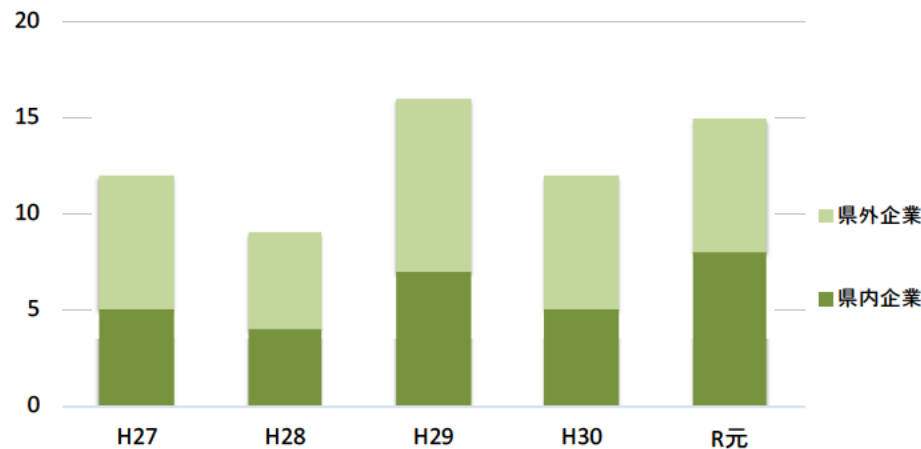
研究

年度目標③ 山形県内企業等との共同研究数を2倍に増やす。また、書誌データベース等に収録されている国際的な学術誌への掲載論文を20%増やす。

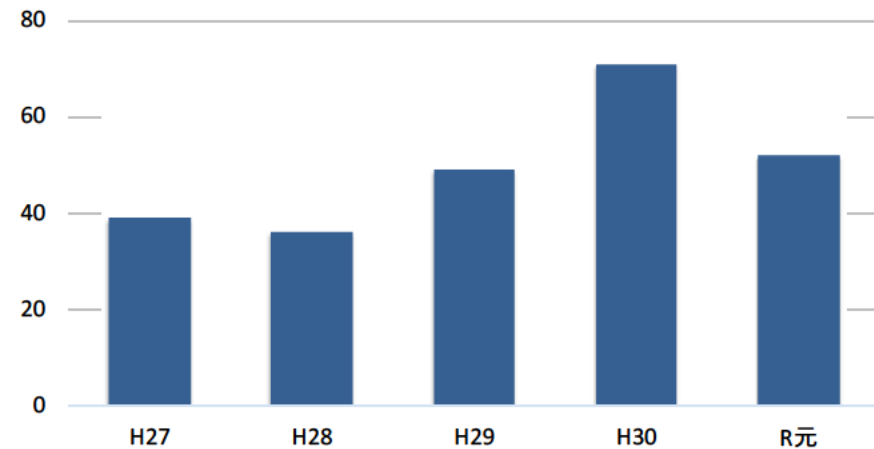
達成状況③ 山形県内企業等との共同研究数は、昨年度の5件から8件に増えた。

オンライン学術データベース（Web of Science）で検索できる国際的な学術誌への掲載論文数は52件と過去2番目に多かったものの、目標とする71件には達しなかった。

共同研究件数(5年間)



論文件数(5年間)



農学部的主要研究プロジェクトの実績

- ・ JST未来社会創造事業（H30～R2，総計6,000万円）
「下水処理場での耐性菌リスクの検知と低減」
- ・ 国土交通省 下水道応用研究（R1～R2），総計4,500万円
「下水道資源を最大限に活用した水稻栽培技術開発と下水道の新たな役割の創造」



国土交通大臣賞「循環のみち下水道賞」を受賞

地域貢献

年度目標④

鶴岡市等の地域と連携し、地域の新規農業者育成事業のさらなる充実と寄附講座食料自給圏形成講座の成果を実装化するとともに、「食」を中心とした全学的な研究拠点の形成を目指す。

達成状況④

食と農のビジネス塾に加えて、鶴岡市立農業経営者育成学校「SEADS」の研修開始に向けた検討を重ねた。

「食」を中心とした全学的な研究拠点の形成のために、自然共生稲作（無肥料、無農薬）プロジェクトとF（Food, Fruits, Flavor）プロジェクトを推進した。

地域定住農業者育成講座

食と農のビジネス塾

～4期生募集～



「食と農のビジネス塾」とは・・・？

農業について、学びたい、加工して販売したい、
販路開拓してもらって収入を増やしたい……
そんなことを思ったことはありませんか？
当校・専攻「食と農」専攻生・農産加工
ビジネス計画書作成の6科目について、
約10ヶ月をかけて、じっくりと学びます。

そしてモノづくりで強い仲間もでき……

【19年度修了生活動】
2019年5月23日(木)～2020年2月10日(月)
長期研修：募集中（～2019年4月26日(金)〆切）

参加費：庄内地域 30,000円／年 庄内地域外 4
学 費：山形大学農学部、酒田市、庄内町、三川町、遊佐
町 各40名

2018年度の様子



都市学習
専門の教室で
SICを勉強
授業内容が濃い！

Shomai Ecological Agri Design School

SEADS

群馬県立 農業経営者育成学校

くわいことは下記までお問い合わせください！
メールまたは電話（平日8:30～17:00）、直接の訪
問（問い合わせ先）
地域定住農業者育成コンソーシアム事務局（山形大学
酒田校 TEL 070-2011-5610 E-MAIL y_

食の学際的研究拠点
ロゴマーク



FOOD · FRUIT · FLAVOR

FOR YU

Interdisciplinary Center of Food Research
in Yamagata University

庄内地域文化研究所 の設立

岩波通明
Mitsuharu Iwakawa

出羽三山
山岳仙傳の歴史を歩く

羽黒山・月山・湯殿山
いつの世も
〈お山〉は人々とともにある

岩波書店

定価 本体 900 円 + 税

人口減少時代の森林管理

人口減少時代の森林管理戦略：野生動物管理との接点を際る
相川 高貴 氏（林業政策アントレプレナー）

森林管理の担い手の長期的変化
林 経寿 氏（山形大学建築研究員）

第6回
東北野生動物管理
研究交流会

**拡大する森林性哺乳類と
ダニ由来の感染症**

人獣感染症の観点からの外来種管理のあり方を考える
武 原雄 氏（国立研究開発法人 森林総合研究所）

野生動物管理でマダニ類による吸血リスクを低減できるのか？
黒島 美久 氏（国立研究開発法人 森林総合研究所）

8月31日(土)
10時00分
～16時10分

申し込み
締切 8月2日(金)
定員 先着250名

会場
山形テルス
アブローズ
入場無料

懇親会
参加者の皆様と
交流しましょう！

ポスター発表
野生動物に
関する事例紹介
募集中！

[注記] 東北野生動物管理研究文化会実行委員会事務局 / 東北森林科学会 / 市町村長東北野生動物保護管理センター
[協賛] 「野鳥生態と社会」/ 学術
[協賛] 国交省自然環境局（山形支庁） 林田正樹、立花広大、渡邊健介 / 山形県森林研究開発センター / 東洋水産
自然食流通推進課（山形県森林研究開発センター） 佐藤真由美、佐々木 昌弘 / 農研機構（東北地域振興部） 二宮はるか

新規就農者や大学生などの受講生19名

SDGsをキーワードとした教育, 研究, 国際交流, 地域貢献

寄附講座

- ・公益財団法人住友電工グループ社会貢献基金寄附講座
「アジアの水・食・健康リスク講座」（H29～R3），総計7,500万円
持続可能な水や食料の循環を理解し、健康リスクを評価できる人材の育成

研究＋国際交流

- ・カルビー株式会社元社長の故松尾雅彦氏
「食料自給圏「スマート・テロワール」形成講座」（H28～R2）
総計 1億7,500万円

研究＋地域貢献

寄付講座食料自給圏スマートテロワール形成講座

特集 庄内スマート・テロワール

の輸入に頼っているという現状です。また、水田はとうに余っており、半分以上の水田はコメがつくれない転作田や耕作放棄地になっています。そこでこの構想では、中山間地の余剰水田や放棄地を畑作に転換し、輸入比率の高い大豆、小麦、ジャガイモ、飼料用トウモロコシを生産して、地域内の自給率を高めることを目的としています。と語るのは、このプロジェクト全体を指揮する山形大学農学部教授・浦川修司さんです。「スマートテロでは、地域の農家が育てた大豆や小麦などの穀物を地元の業者が加工し、小売店を通して地元の消費者に届けます。並行し、その規



山形大学農学部助教授
中坪あゆみさん
岩手県生まれ。山形大学大学院博士課程修了。2016年より山形大学農学部へ、庄内スマート・テロワールでは畑作チームとして大豆、小麦、ジャガイモの商品開発を担当している。

山形大学農学部教授
浦川修司さん
三重県生まれ。山形大学農学部卒業。専門は高産、三重県庁、国の試験場を経て2015年より山形大学農学部へ、高産農産物部門長、庄内スマート・テロワール推進協議会事務局長。

格外品で調合したエサで地元の豚を育て、豚肉を加工品にします。豚の排泄物は良質堆肥にして畑へ還すことで、地域ぐるみの循環を生み出します。この理論のもと、2016年より庄内の生産者、加工業者、小売店が4つのチームを組み、加工品開発に挑戦してきました。すでに畜産チームはウインナーとハム、ベーコンを、大豆チームはみそを開発し、小売店で販売。今年はジャガイモチームのコロケ、小麦チームのライ麦の生麺なども発売予定です。しかし、畑作の3チームを担当する中坪あゆみさんは、エサにする畑の規格外品がまだ少ないため豚の肥育頭数を増やせないこと、堆肥の循環が難しいこと、そして掘削者である松尾さんからの5年にわたる支援が今年で終わることなど課題は山積みだと話します。「ただこのプロジェクトはあくまでも次世代への『可能性の種まき』です。昨年6月には大学と鶴岡市が連携して庄内スマート・テロワール推進協議会を立ち上げたので、今後は自立体制をしっかりと構築しながら、ゆっくりでも全員でスマートテロが目指す未来に向かって一歩ずつ進んでいけたらと思います」。



庄内産のエサで育った豚を鶴岡市内の加工業者が加工したウインナー。消費者や小売店の意見を取り入れることで、食味・価格ともに優れた、「2019年やまがたふるさと食品コンクール」では最優秀賞を受賞した。

庄内スマート・テロワール

「ライバルは輸入食品」との合言葉のもと、山形大学の農学部を中心に地元の農家・加工業者・小売店が一丸となってチームを結成。2016年より、この庄内地域で循環型経済圏を形成して食料自給率を高める新たな取り組みが行われています。

日本の食料自給率の低さに危機を叫ぶ専門家も少なくない昨今。ところが、その点を農村に残された成長チャンスと捉える動きがあります。それがカルビーの元会長・故松尾雅彦氏が提唱する「スマート・テロワール（以下スマートテロ）」構想です。「日本はとにかくコメがあれば安心という考え方が根深く、コメの自給率はほぼ100%です。しかしその反面、私たちの食卓には輸入食品があふれ、食品全体の63%が海外から



スマート・テロワールの未来図